

論 文

## 上田秋成と『莊子』

— 『諸道聴耳世間狙』の序文を中心に —

李 婷

同志社女子大学  
現代社会学部・社会システム学科  
助教（特別契約教員）

## Ueda Akinari and 『Souji』

— About the preface of 'Shodo Kikimimi Sekenzaru' —

Tei Ri

Department of Social System Studies,  
Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Assistant Professor (Contract)

はじめに

上田秋成（一七三四—一八〇九）は名高い『雨月物語』、『春雨物語』で読本作者として名を知られているが、俳人・歌人であり、国学者でもあった。彼が『源氏物語』について書いた評論「ぬば玉の巻」は次の序文で始まる。

昔和泉の国堺の津に、宗椿といふ人ありけり。光源氏の物語を廿四部までうつし、朝顔の巻に筆をとゞめられしといふ事、人あまねく語り伝へて、世のめざまし草なりけり\*。

この序文によれば、安永八年（一七七九）の秋、秋成は湯治のために但馬の温泉に出かけた。そこに滞在している間、泊まっている宿の隣人が「むかしの人の夢物がたり、やがての寝ざめにかいしるしたる筆の跡」を持って来た。読んでみたら素晴らしいものだったが、読みづらかったため、書き改めたのが『ぬば玉の巻』である。

本文では、宗椿が『源氏物語』の「朝顔」の巻を書き写している途中、眠りに落ちる。夢の中で、宗椿は明石の浦に出て、柿本人麻呂に出会う。『源氏物語』の有り難さを語る宗椿に向かって、人麻呂はその物語が「何ばかりの益なきいたづら言」で、「あだ物」であると根底から否定する。それを不服とする宗椿は人麻呂と論弁を展開するが、最後に人麻呂が「夜がもうすぐ明けると云って、立ち上がった後、宗椿は夢から目を覚ます。

『ぬば玉の巻』は宗椿が茫然自失になったところで終わる。月日を費やし、貴く思つて二十四回も写していた『源氏物語』が「うたて」くなるほど、人麻呂の語つた『源氏物語』「いたづら言」論は宗椿に大きな衝撃を与えた。しかし、この『源氏物語』論は人麻呂だけが語っているわけではない。秋成が湯治に行った時の紀行文『秋山記』では、秋成が須磨で出会った法師は人麻呂と殆ど同じ物語論を語っている。この一致から、人麻呂と法師が語つた『源氏物語』論は実は秋成の『源氏物語』論であると考えられている\*。

秋成が柿本人麻呂や法師に託して語つた物語論、即ち「寓言論」については、早い時期に中村博保氏が「秋成の物語論」で詳しく論じられている\*。中村氏はこの論文で、「寓言」という言い方は『莊子』の「寓言八十が九。外ヲ藉リテ之ヲ論ズ」によつたものであると指摘し、その意味は、「自分の云いたいと欲することもその主観性のために相手に信じられるとは限らない。そういう場合には外をかり、他に托して語るの一番である」と説明されている。また、中村氏は秋成が『ぬば玉の巻』で使つた「わたくし心」（秋成はこの言葉に「即女ゴコロ也」と注している）

と「男魂」に注目して、秋成の物語論を次の様に纏められている。

自分一個にかかわってモラルを忘れた心が「わたくし心」であり、天下を憂い公を志向する男性的精神の対極にあるものとしてその没モラル性が批判されているわけであります。つまりそれが「あだごと」（虚）を「まめごと」（実）につくりなすという基本的な誤りをおかせることになるというのであります。

（中略）秋成は、物語は「そらごと」であり、現実には効用のない「あだごと」ではあるが、そこに内在化されたテーマが「まめごころ」によって裏打ちされたものであるかぎり、存在の理由をもっていると考えていたことがわかります。<sup>＊4</sup>

そして、秋成のこのような寓言論は処女作である浮世草子『諸道聴耳世間狙』の序文に書かれた戯作意識から発展したものであると中村氏が指摘されている。

『莊子』「寓言第二十七」から出来た秋成の「寓言論」の源が処女作の『諸道聴耳世間狙』であるならば、若い時期の秋成は既に『莊子』と接点を持つことになる。小論では、その処女作『諸道聴耳世間狙』の序文から、秋成における『莊子』の影響について考察する。

## 一

『諸道聴耳世間狙』（以下『世間狙』と略称す）は当時大坂文壇の奇人・粹人モデルにして書かれた浮世草子である。この作品が上梓されたのは明和三年（一七六六）で、談義本が流行する時期である。談義本の流行は当時の思想界に老荘思想が流行していることを反映しており、当時江戸中期における老荘思想の流行については既に先行研究がある。<sup>＊5</sup> 当時青年である秋成もはやりの老荘、特に莊子の思想から影響を受けている。それは次の『世間狙』の序文から窺える。

彼賢人の仲間法度に、偽めきし真はかたるとも、真くさき虚言ははかぬものとや、釈迦の藏経、莊子の南華経、うそのまことの真のうそで、おもはくは我が心より出で、人の口にかはりゆき、貂となり、鼯となる。其尾に喰つく世の噂を。天に口なし。婆嬪のそしりはしりにも。いは猿のいましめをまもれば。こけ狙の指ざしにあふ。さらば尻わらひの戯れ草を朝三暮四の筆までに書聚めて。題号を。聴耳世間狙とよぶ事は。見猿の人の伽ともならんかし。<sup>＊6</sup>

字面から見ただけで、「莊子の南華経」、「朝三暮四」の表現が『莊子』から取ったと分かる。しかし、序文全体の意味は取りにくい。序文だけではなく、『諸道聴耳世間狙』の題目自体の意味も分かり難い。この題目及びこの序文について、幾つか

の解釈があるが、以下主なるものを挙げる。

まず早い時期に、中村博保氏は前出論文で、

『世間狙』の序文「釈迦の藏経、莊子の南華経、うそのまことの真のうそで、おもはくは我が心より出で、人の口にかはりゆき、貂となり、鼯となる」ということばを、表現が作者の意図をはなれ、客体化し、そら言化するということをのべた。<sup>＊7</sup>

と序文前半の作者の意図を解し、高田衛氏は「和訳太郎の世界」<sup>＊8</sup>で、

秋成は、反語的に「真くさき虚言」を、常識的・倫理的見地からみれば「吐かぬもの」としてのそれを、あえてしたいという自覚をもっていたのではないだろうか。「偽めきし真」と「真くさき虚言」では、すくなくとも作者の立場からいえば天地雲泥の差があり、対立する。秋成はしかし、ここでは虚の中に実をよみとる読者の立場をのめりこませて、冗談めかしてませあわせてしまうのである。

と論じられ、序文の「南華経」の語から、「莊子の寓言説が意識されている」と述べられている。

また森山重雄氏は著作『上田秋成初期浮世草子評釈』<sup>＊9</sup>で、序文全体について、次の様に解釈しておられる。

秋成がこの草子を書いた時、世間に対するある種の先取り性を企てたのかもしれない。どうせ「婆嬪のそしりはしり」となるのであるならば、みずからその「そしりはしり」を演じてみよう。釈迦の大藏経、莊子の南華経にしたところである。それは経典という形をとっているけれど、考えようによっては、真と言えば真、虚言と言えば虚言で、要するに信じてこれを準則としないものにとつては、ナンセンスである。それならばいっそ、経典などという仰々しい形をとらず、当世の浮世草子風にもっとくだけて書いてみよう。そのためには聴耳草子がいい手本である。ただ自分が書く聴耳草子は、神の声を聞くのではなく、世間の評判に耳を傾けて、これと交わりながら、世間咄にわりこんでいって、これを戯作の方法で増幅したものである。時によれば知人・友人の生活の機敏を暴露することになるかもしれない。むかし、竹林の七賢人たちは、仲間法度として、「偽めきし真は語るとも真くさき虚言はつかぬ」と掲げたという。しかし、自分は賢人ではないから、偽めきし真を語ろうとして、或いは真くさき虚言を吐くかもしれない。しかし、それは猿の尻笑に類する戯草として許して貰いたい。もし、この戯草が三猿を守ると称する偽善的人達のお笑い草になっ

たら、自分としては本望である。

即ち、竹林の七賢人が老荘・虚無を尊び、韜晦して清談を好んだ所から、「彼賢人」を竹林の七賢人とし、「うそのまことの真のうそ」の表現は、「うそはまことの骨」「まこととはうその皮」などのたとえに類する虚実論<sup>11</sup>であると理解されている。「天に口なく」については、「天に口なし人ももって言わしむ（天はものを言わないけれど、人の口を通して天意をいわせる）を略したものか、あるいは、天に口あり地に耳あり（秘密や悪事のもれやすいたとえ）を逆転させたものか」と解釈され、「朝三暮四」については、出典を挙げた上、「ここでは、朝晩にぼつぼつ書きためたほどの意であろう」と説明されている。

小椋嶺一氏は論文「初期創作意識の構造——「騙り」から「寓言」へ——」で、釈迦の教えも荘子のそれも、長い長いとつてもない人間の歴史のうねりの中で個々の人間の「我がおもはく」により、様々に変化し、何が真実で、何が虚であるか分別しきれなくなってしまうことを指摘する<sup>10</sup>。と全体の意味を説明されている。

また、長島弘明氏は『諸道聴耳世間狙』の解題で、『世間狙』が多田南嶺の『鎌倉諸藝袖日記』から著しい影響を受けたことを指摘し、本書の題名「諸道聴耳世間狙」も、南嶺の『袖日記』を襲いつつ「諸藝」に対して「諸道」、「荘子」の寓言論をくずして（序中に「荘子の南華経」とあり、また「朝三暮四」の故事も「荘子」「齊物論篇」に出る）、それぞれの道の著名人（諸道）の、世に伝わる噂話を悪戯気たつぷりに誇張して描いた（「聴耳世間狙」という、本書の方法を明示したものに他ならない。と書名の意味について説明された。また、長島氏の論文「和訳太郎論——ゴシップ小説の方法——」<sup>12</sup>では、

この秋成の処女作の題名「諸道聴耳世間狙」は、いかにも浮世草子らしいひねこびた序文の大意を読み取れば、それぞれの道での著名人（諸道）の、世に伝わる噂話を耳にして（「聴耳世間」）、その猿まねよろしく悪戯気たつぷりに誇張して描いた（「狙」）作ということになる。モデル使用を揚言した題名である。

と、『世間狙』の解題に類似した説明が見られる。

秋成の「猿」は序文の「朝三暮四」と関係があるという森山・長島両氏の考えに対して、山本秀樹氏は、「猿」という言葉は、「単独で、『荘子』の寓言論の代表となれるような言葉であったとは思えない」とし、「猿」とは宝暦時代、「下目付を通じて大阪城代に情報を提供する役目を帯びた人々」で、このテクストの語り手であ

るとした<sup>13</sup>。また、「彼賢人」の部分については、「真らしき虚はつくとも虚らしき真は不可謂」という日本の諺をあげ、『荘子』と竹林七賢人とは必ずしも関連しない<sup>13</sup>と指摘した上、

序は、まず人の発言、およびそれをうけて伝えられたる噂が、いかにあてにならないものであるかを述べる。しかし、噂が信用ならないからと言って、それのうち興じないのも莫迦々々しい。だから、噂を書き集めたものが本書だ、と言うのである。それを文飾を凝らした戯文で綴る。文の後半は、猿（の縁語）<sup>14</sup> 尽くして記されている。

とまず題目の「猿」について定義してから序文を解釈しておられる。

最近では、篠原進氏は「ミネルバの梟の行方——『世間狙』と『妾気質』のあいだ」<sup>14</sup>で、秋成の『雨月物語』・『諸道聴耳世間狙』両作と享保十七年（一七三二）出版された信更生の『都莊子』との関係について述べた後、

「世間狙」という奇妙な書名は、この「朝三暮四をしらぬ衆狙」をも含意したものであったのではないだろうか。となれば、始発から相当な悪意が込められていたことになる。変化の妙を寓意する「貂となり、鼬となる」を含め、序文全体を覆う「荘子」の影。「彼賢人の仲間法度」とは「荘子」そのものを指し、その序文は「悪意」をオブラートで包む「うそのまこと」という寓言的方法の試行を示唆した記述とも考えられるのである。

と、『世間狙』の序文と『荘子』の深い繋がりについて論じておられる。

以上の先行研究を総合的に見ると、山本氏以外の先行研究では、全て秋成の序文の『荘子』との関わりについて言及している。山本氏は「猿」と『荘子』の関連性には必然性を持たないとしているが、現に序文に「荘子の南華経」、「朝三暮四」の表現が出た以上、序文と『荘子』の関係は否定できないと思われる。

ところで、中村博保氏を始め、高田・森山・長島・篠原四氏の解釈からは、『荘子』即「寓言論」との考えが窺える。この「寓言論」は創作の手法であり、創作に対する態度であるように思われる。確かに当時では、『荘子』の「寓言論」手法をふんだんに使った談義本が流行しており、秋成はその影響を受けたことは否めない。しかし、『寓言論』だけでは、『世間狙』の序文の意味を全部読み切れないと思われる。それに、『荘子』三十三章の趣旨は「万物斉同」、則ち「齊物」論である。秋成が『荘子』に関心を持っているならば、『寓言論』しか知らないはずはなく、『齊物論』第二なども知っていたと考えられる。その証拠に、序文の「朝三暮四」の表現は「齊物論」篇から出ているほか、巻三の三「雀は百まで舞子の年寄」では、後家の髪の毛が「九万里に羽をのす大鵬ほど鬣出して」と、『荘子』の「逍遥遊」第一



知<sup>二</sup>理ノ本同<sup>一</sup>キコトヲ者。謂<sup>二</sup>之ヲ朝三<sup>一</sup>。(略)名ハ三ト與レ四也。實ハ通レバ七ノ數ナリ也。名實未<sup>レ</sup>嘗變<sup>レ</sup>但移<sup>レ</sup>易朝暮<sup>ヲ</sup>。而衆狙ノ喜怒隨<sup>レ</sup>之。此ハ喻<sup>二</sup>是非之名<sup>一</sup>ハ雖<sup>レ</sup>異。而理ノ實<sup>ハ</sup>則<sup>レ</sup>同<sup>一</sup>。但<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>因<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>則<sup>レ</sup>世<sup>ニ</sup>自<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>爭<sup>ヲ</sup>矣。

(神明ハ、猶精神ノゴトシナシ。精神ヲ勞苦シ、自ラ一偏ノ説ヲ爲シ、強ヒテ相是非シテ、理ノ本同ジキコトヲ知ラザル者ハ、之ヲ朝三ト謂フ。名ハ三ト四ナリ。實ハ通レバ七ノ數ナリ。名實未ダ嘗テ變ゼズ、但朝暮ヲ移シ易テ、衆狙ノ喜怒之ニ隨フ。此ハ是非ノ名ハ異ルト雖モ、理ノ實ハ則チ同ジタルヲ喻フ。但ダ能ク是ニ因レバ則チ世ニ自ラ争フコト無シ。)

この注釈によれば、「朝三暮四」は「是」「非」の名こそが異なるが、「理の實」は同じであることの喩えである。「是」「非」は「理の實」の外延であり、「理の實」はその内包・核心である。是であれ、非であれ、その元となるものは一緒である。これは所謂「齊物的」である。この「齊物論」の「是非」を、言い方を変えてみると、「是」だと認める事柄は則ちその人にとっては「真実」であり、「非」だと認識される事柄はその人にとっては「虚言」である。それで、「是・非」は「真実・虚言」と置き換え可能である。「是・非」の元は同じであれば、「真実・虚言」の元も同一であることになる。秋成が序文で使っている対義語の連続、「偽めきし真」、「真くさき虚言」、「うそのまこと」「真のうそ」は、「真実・虚言」という外延的な部分を相殺して、その同一である内包を意識して書かれたようにも読める。

では、「是」「非」は実は同じであるならば、その差異は何故生じたのか。その理由は「寓言論」で述べられている。「寓言」第二十七では、寓言、重言、卮言の定義の後、「不<sup>レ</sup>言則齊<sup>シ</sup>。齊<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>言不<sup>レ</sup>齊<sup>ラ</sup>。言<sup>ト</sup>與<sup>レ</sup>齊不<sup>レ</sup>齊也。故曰無言<sup>ト</sup>。」(言ハザレバ則チ齊シ。齊、言トハ齊カラズ。言ト齊ト齊シカラズナリ。故曰ク無言ト。)と、「言」、則ち言葉が発する事、或は発された言葉と「齊」の関係についての記述が見られる。林希逸の注釈を見ると、「齊」は「一」である。それぞれの「心」、則ち「私心」を持った「言」で「一」を論じようとする、「齊一」であることは得られなくなる。「無心の言」である「無言」で論じれば「齊」であることが可能である。ここの「心」は、「それぞれの心」で、「わたくしごころ」を指すと思われる。先程「寓言論」に関して述べた時に、立場の問題について言及した。出された発言に対して、聞き手は自らの立場から、是と非の判断を下すのであるが、今引用した部分も併せてみると、そもそも、発言は出された時点で、既に話し手の立場によったものであることが分かる。秋成が序文で書いた「おもはくは我こ、ろより出て人の口にかはりゆき。貂となり馳となる」は、自分の書いた作品が客体的なものであるという認識の現れである。この認識は「寓言論」に似ている。

以上述べた内容を踏まえて、序文を考えると、「彼賢人の中間法度」である「偽めきし真は語れども、真めしき偽は語らぬ」は、うそに聞こえる本当のことは言うけれど、本当のことに聞こえる嘘は言わない。即ち「真実しか語らない」というのは「言葉」を発した人の本意である。しかし、それを聞き手によっては、「偽り」に聞こえたり、「真」に聞こえたりする。釈迦の「経威」、莊子の「南華経」も同じく、その真意はともあれ、「文字」或は「言葉」で表現されてしまうと、それを読む・聞く人の判断・解釈によっては、「うそ」になったり、「まこと」になったりする。

それに続く「おもはくは我こ、ろより出て人の口にかはりゆき。貂となり馳となる」は、人の「思惑」は内側から外側に、言葉や文字の形で出されると、それを聞いた人或いは読んだ人のそれぞれの立場からの解釈によって、姿がどんどん変わって行き、元の「おもはく」とはかけ離れていく。これは話し手・書き手(発信源)としての秋成の感慨である。しかし、『世間狙』で書かれた話には、殆どモデルがあると書かれている。その素材となるモデルの噂話、或いは伝えられた奇行などの元々の姿は、聞き手・読み手(受信源)の秋成にはそれを知る由もない。既に捻られた情報を受信して、もう一回自分の立場からそれを情報として発信する。そのため、秋成が書いた『世間狙』には「尾に喰つく世の噂」が出るかもしれないが、自分が書いた噂話自体も「尾に喰つく世の噂」の一つに過ぎず、そのモデルの元々の姿から生じた外延の更なる外延の一つに過ぎないのである。

「天に口無し」の意味については、森山重雄氏は「天に口なし、人をもつて言わしむ」の略か、「天に口有り、地に耳あり」の逆用としておられるが、もし「人をもつて言わしむ」の意味なら、その続きの「婆嬋のそしりはしり」が天意になる。しかし、ここでは、「天に口無し」は「婆嬋」の一文に係ると考えるより、寧ろ単独的に考えた方がいいかもしれない。つまり、天には口がないから、その真意は計り知れず、是非、真偽の区別は分からない。口がある婆嬋の悪口を気にして、自分が「言わざる」の戒めを守って、何も言わなければ、「そしりはしり」は避けられても、今度は群から追放された猿みたいに、仲間はずれにされるであろう。谷川士清(一七〇九―一七七六)が著した『和訓栞』によると、「こけざる」は「群猿の中に、はねだされて、独りになりたるをいふ」という意味である。それなら、自分の非正当性(偏った立場、捻られた情報)を見ないことにして、他人の噂話をしよう。しかし、自分の「書く」という作業は、朝三暮四の猿と同じく、本質について何一つ触れていない。というのは、自分が書くかと思っている物事にとって、書き表したのもその外延に過ぎず、その核心を突いたかどうかは分からないものであ

る。にも関わらず、その出来具合で一喜一憂する。その作品を読んで、悦んだり、怒ったりする読者が「衆狙」と同じならば、自分もその「衆狙」の一員である。この作品を「聴耳世間狙」と呼んで、読まない人の話題にもならないであろう。

以上、『莊子』の「齊物論」・「寓言論」を根拠に、『世間狙』の序文の読解を試みた。この序文から滲み出す嘲笑は容易に読み取るもので、篠原氏も前掲論文で、「その序文は「悪意」をオブラートで包む「うそのまこと」という寓言的方法の試行を示唆した記述」とされている。しかし、その嘲笑は他人に向けたものではなく、自分にも向けたものである。もし序文に悪意があるとすれば、それは読者を諷刺しているのではなく、深層には自己もその悪意の諷刺の対象になっていると思われる。

### 終わりに

元々は同じであるものをそうとも知らず、それを嘘だの本当だのと騒ぎ、悦び怒るのは読者に限らず、作者も同じであると言えよう。また、所詮本質については知り得ないと分かりつつも、書くことをやめられないのは更に悲劇的なことであると言えよう。秋成にとって、創作することは始終「いたづらごと」であって、遊びであった。傍観者の立場で人間の生き様を描くようになったのは、秋成の「のらもの」意識も勿論働いているが、その深層には、『莊子』の齊物論的な認識があると思われる。即ち、目に見える人間の営みは表層的なもので、見る人によってはその様相が違う。それだけでは人間の本質の全てが理解できない。作者として書いたものと同じ、同じ作品に対する読者の見方が違う。また一方では、国学者としての秋成は古典作品の読者でもある。書物に対する懐疑的な態度も、書かれた物の本質は分からないという考え方の現れであろう。それなら、どちらにも偏らず、中間を保つ。これが秋成の傍観者であり続けられる理由とも言えよう。冒頭で引用した「ぬば玉の巻」は、宗椿が夢から覚めたところ、「過ぎにしかたや夢ならん。見し夜の夢や夢ならん。夢うつ、とも。みづからはさだめかたかくてなん」で終わる。「齊物論」の最後の莊周夢に蝶々を見るくだりの終わり方と同じである。また、秋成の文集『藤篋冊子』に収められた「花園」も、『莊子』の「莊周夢に胡蝶となる」と同じ趣を使っている。「寓言論」だけではなく、『莊子』の齊物論に基づいた秋成の物語観は、最後の『春雨物語』まで貫く。『莊子』の影響は、秋成の初期から晩年までずっと続いているのである。

### 注

\* 1 『上田秋成全集』第五卷、中央公論社、平成四年五月。

\* 2 前出『上田秋成全集』第五卷にある「ぬば玉の巻」の解題（日野龍夫氏が執筆）による。

\* 3 中村博保「秋成の物語論」（『日本文学』一三卷一、二、昭和三十九年二月、後『上田秋成の研究』、ぺりかん社、平成十一年四月に所収）。

\* 4 同3、八五頁。

\* 5 近世中期における老荘思想の流行については、中野三敏「近世中期における老荘思想の流行——談義本研究」（『国文学研究』第三十一集、昭和四十年三月、後『戯作研究』、中央公論社、昭和五十六年二月に所収）、福永光司「江戸期の老荘思想」（『道教と日本文化』所収、人文書院、昭和五十七年三月）日野龍夫「近世中期における老荘思想」（『文学』昭和五十七年三月号、後『官長と秋成』、筑摩書房、昭和五十九年十月に所収）等がある。

\* 6 『上田秋成全集』第七卷、中央公論社、平成二年八月。

\* 7 同3、九一頁。

\* 8 高田衛「和訳太郎の世界」（『上田秋成研究序説』、寧楽書房、昭和四十三年所収）。九三頁。

\* 9 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」（国書刊行会、昭和五十二年四月）。語釈もそれによる。

\* 10 小椋嶺「初期創作意識の構造——「騙り」から「寓言」へ」（『橘茂先生古稀記念論文集』、大谷女子大学、昭和五十五年十一月、後『秋成と宣長——近世文学思考論序説——』、翰林書房、平成十四年六月、に所収）。一八三頁。

\* 11 同3、三六九頁。

\* 12 長島弘明「和訳太郎論——ゴシップ小説の方法——」（『共同研究秋成とその時代』、高田衛編、勉誠社、平成六年十一月）。(四五三頁)。

\* 13 山本秀樹「諸道聴耳世間狙」の意味（『近世文芸』第七〇巻、平成十一年七月）。(四七頁)。

\* 14 篠原進氏「ミネルバの梟の行方——『世間狙』と『妾気質』のあいだ」（『文学』第一〇巻第一号、平成二二年一—二月、岩波書店）(二二九頁)。

\* 15 『莊子』の引用は、『莊子膚齋口義』（寛永六年（一六二九）京都風月宗知印本、『和刻本諸子大成』第十一輯所収、長澤規矩也編、汲古書院、昭和五十

- 一年)による。返り点については、一部改変あり。
- \* 16 同3、九一頁。
- \* 17 同8、九二頁。
- \* 18 同11、四五五頁。
- \* 19 同11、四六五頁。
- \* 20 原文は次のようになっている。「不言則齊。以<sub>ニ</sub>スレバ<sub>レ</sub>無言<sub>ノ</sub>之言<sub>ヲ</sub>。則歸<sub>ニ</sub>ス<sub>於</sub>一<sub>ノ</sub>理<sub>ニ</sub>。齊<sub>ハ</sub>一<sub>也</sub>。以<sub>ニ</sub>此<sub>ノ</sub>一<sub>ヲ</sub>而形<sub>ニ</sub>ハス<sub>諸</sub>言<sub>一</sub>。以<sub>ニ</sub>其言<sub>ヲ</sub>而論<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>。皆為<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>ト所<sub>レ</sub>容<sub>レ</sub>ル<sub>心</sub>。則不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>タル<sub>コト</sub>ヲ<sub>齊</sub>一<sub>矣</sub>。故曰。齊<sub>ト</sub>與<sub>レ</sub>言<sub>不</sub>齊。言<sub>ト</sub>與<sub>レ</sub>齊不<sub>レ</sub>齊也。惟無言<sub>ハ</sub>則齊。無言<sub>ハ</sub>無心<sub>ノ</sub>之言也」。

